

れていた。この2ヶ所の生育地は、保護が不十分であり、レッドデータブックでは絶滅危惧種に挙げられている。1992年8月26日、空知支庁(天塩山地)において本種が新たに確認されたが、この生育地もかなり小面積であるので、細心な保護策が必要である。

ミヤマノギク *Erigeron miyabeanus* Tatew. et Kitamura (証拠標本: K. Sato & J. Samejima 770402-77043; K. Sato 850011-850015; K. Sato & S. Umezawa 930177) 本種は、北海道固有種として宗谷支庁の北見ポロヌプリに限られていた(Tatewaki 1933. 植物分類地理 2: 86-92)。筆者は、1977年8月1日十勝支庁(日高山地南部)に、1985年7月7日空知支庁(天塩山地)に、それぞれミヤマノギクの新産を確認している。これらの標本は、上記文献における原記載(Tatewaki and Kitamura, Acta Phytotax. Geobot. 2: 90, 1933)と照合すると、ほとんどの形質が一致した。しかしながら、十勝支庁の標本ではロゼット葉の幅が3cm、空知支庁の標本では花径が4cm、ロゼット葉の幅が2.5cmとなる大きな個体が含まれていた。本種の産地は北海道の3ヶ所に増えたことになるが、いずれの生育地も小面積であるので、本種の保護には細心の注意が必要である。

アポイアズマギク *Erigeron thunbergii* A. Gray var. *angustifolius* (Tatew.) Hara (証拠標本: K. Sato & J. Samejima 770401; K. Sato 930170-930171) 本種は、北海道のかんらん岩地(アポイ岳)と石灰岩地(峠山)に知られていた。た

だし、峠山産植物はミヤマアズマギクの品種キリギシアズマギクとして除く考えがある(Inagaki et al. 1971. 北海道教育大学紀要(2B) 21: (41)-(53))。一方、筆者はアポイアズマギクを1977年7月16日に十勝支庁(日高山地南部)で、1993年6月20日には鶴川上流でそれぞれ確認している。ただし、これらの標本は、ロゼット葉が線状篋形であることによって、ジョウシュウアズマギクに近い特徴を示している。しかし、これらは、冠毛の長さが3mm未満であることと、根葉、花茎およびその葉に毛が多いことによってアポイアズマギクに同定される。2ヶ所の生育地は、共に河川と未舗装の車道に介在しているので、道路拡幅などの影響によって破壊される危険性が高い。

クシロチドリ *Herminium monorchis* (Linn.) R. Br. (証拠標本: K. Sato et al. 880709-880711, 880860-880861; K. Sato 910055, 910245-910248, 920078) 本種は、朝鮮、北インド、シベリア、ヨーロッパに分布し、日本では北海道釧路の分布が知られている(大井 1975)。レッドデータブックでは本種が危急種に挙げられている。北海道では渡島大島にも本種の分布が報告されていたが(菅原 1958, 函館植物研究会)、その後の確認がなかった。筆者は、同島における1988年からの調査において本種の分布を確認している。渡島大島の生育地は、現在では本種の最大の生育地と考えられるので、厳重な保護が必要である。

(北海学園大学教養部)

*本誌 62: 63-64, 1987から続く。

ニュース

岩槻邦男氏にエジンバラ公賞

Dr. K. IWATSUKI Received the Duke of Edinburgh Prize

本誌編集委員岩槻邦男氏は、このたび1994年度日本学士院エジンバラ公賞を贈られた。

この賞は日本学士院賞と同等のもので、野生生物保護基金(WWF)総裁のエジンバラ公を記念し、自然保護と種の保全に関する優れた研究に対

して与えられる。同氏の「植物の多様性の解析およびその滅失に関する保全生物学的研究」が受賞の対象とされ、6月6日に受賞式がおこなわれた。植物分類学の研究がこのような方面から評価され、しかも本賞はこれが第一回であることを考えると

その意義は大きく、基本的と言われながらとかく見過され勝ちな、分類学の仕事に光を当ててくれた同氏の業績に対して、あらためて拍手を送りたい。

岩槻氏は東大植物園就任以来、同園の経営改善に力を注いだばかりでなく、絶滅危惧植物のハハジマノボタンやヒスイカズラの種保全研究をリードして、植物園が遺伝子保存事業に積極的に関与する見本を示した。環境庁の野生生物調査事業にも、座長として調整・とりまとめに奔走している。その成果の一つである「我が国における保護上重要な植物種の現状」(1989)は、日本植物の危機的現状をはじめて知らしめたものとして、世にショックを与えた。これに続いて公表された著書「日本絶滅危惧植物」(1990)、「植物からの警告」(1994)

などは、この衝撃をあらためて広く定着させ、従来の「保護」という立場から踏み出して、自然界における種の多様性の役割を、分類学の立場から一般に理解してもらおうことを意図している、

植物分類学の人は、世間的に目立とうとしないのを美学とする傾向がある。京都大学時代の岩槻氏を思うと、近年の活躍ぶりは思いのほかである。6月20日のお祝いの会で同氏が語ったところでは、植物園就任に当たって、種の保全についての園の役割をPRするために、積極的に動くことを決意したとのことである。今回の受賞はその成果であるばかりでなく、分類学の役割を「種の多様性」という、これまで無かった観点から世に定着させた功績は、記憶されるべきである。

(金井弘夫)

新刊

□長井真隆：とやま植物誌 247 pp. 1994. ¥1,800.

富山県は海岸近くの照葉樹林から立山や白馬岳の高山植物群落まで、比較的狭い地域に様々な群落が見られる特徴があり、また深い黒部溪谷の特殊な環境は、日本海側ではここにしかないツガ林や、内陸型のカラマツ林を成立させている。日本海側に位置するため、深い積雪や冬の強い季節風などの関係で、太平洋側には見られない群落が形成されているなど興味深い地域である。本書はそれぞれの異なる環境に適応してどのような群落が形成されているか、またその群落を代表する植物がどのような生活をしているかを、一般の人に解りやすく解説したものである。山地の植物と環境との関係とは別に、著者が力を入れているのは、平野部の植物である。剣山や立山から流れる黒部川や常願寺川は、下流に広い扇状地を作り、その上に人の生活が営まれている。家のまわりにつくられる屋敷林による植物の利用と温存、伏流水が湧き出ることによる低湿地の水草や、そこに適応した沢スギなどが述べられている。スギに関しては山地の立山スギも詳しく述べられているのだから、片貝川の洞スギのような日本海側特有な形を持つものも載せる必要があるだろう。植物を基礎

とした博物学の傾向の強い本である。学問的な解釈も必要だけれども、博物学的な面をもっと強めれば、さらに豊かな内容のものとなるであろう。地方の植物誌のひとつの行き方を示すものとして関心がもたれる。入手先は次のとおりである。シー・エー・ピー・タウン情報富山。富山市大手町6番14号 市民プラザ3F。 (山崎 敬)

□Editorial Committee of the Flora of Taiwan: *Flora of Taiwan, 2nd ed. Vol. 3* 1084 pp. 1993. Department of Botany, National Taiwan University.

台湾大学の黄 増泉氏を長として、初版とは全く異なる編集委員のもとに、台湾植物誌の改定が行われている。委員の中には東北大学の大橋広好氏も加わっている。その第3巻が出版された。マンサク科からセリ科まで、その範囲は初版と同じである。執筆者は初版と同じ人もいるけれど、かなり新しい人になり、内容は初版とはかなり異なっている。日本にも分布する植物が多数あり、日本の植物の研究には重要な参考文献である。日本と関係のある種類で、日本での扱いと異なるものがある。総てに当たる訳にはいかないが一部を挙げておく、将来検討していただきたい。